

海を越え確かめたきずな



ウチナンチュ会議 歓迎式で交流

【ホノルル29日＝平良吉弥】「アロハ」「ハイサイ」。世界中から集った三千人のウチナンチュが出会い、再会し、交流した。「分ち合おうウチナンチュアロハ」を台言葉に二十九日夕（日本時間三十日午後）、ワイキキのホテル屋外広場で始まった「第一回世界のウチナンチュ会議 in ハワイ」（主催・ハワイ沖繩連合会、WUBハワイ）。歓迎レセプションには約千人の沖縄県からの参加者と米国、ブラジル、アルゼンチンなど世界十カ国の参加者を合わせ、計約二千人が出席。地元ハワイの県系人のホランティアが中心となった温かいもてなしの席で、海を越えて集ったウチナンチュがきずなを確認した。（一面参照）

出会いは再会 喜び分かつ

夕日が沈む海を前に始る記念撮影をする人々。まった式典には、アロハ人々の顔には笑みがこぼれ、シャツ姿のウチナンチュが、ウチナンクチャや英語、スペイン語で交流する国際色豊かな席となった。友人や親せきと久しぶりの再会を果たし、抱き合う参加者の姿や笑顔

会議参加のため、世界十カ国からウチナンチュが集まった「米ハワイ・ホノルル

で記念撮影をする人々。人々の顔には笑みがこぼれた。主催したハワイの県人たちはハワイの料理に加え、泡盛などの飲み物で参加者をもてなした。両親が糸満市出身の二世、ハワイ沖繩連合会の玉城ジョージ会長（左）は「すべてホランティアの協力で実現できた。頭が下が

きずながあったからこそこれだけ多くの人が集まった」と喜んだ。円卓を囲みペルーからの参加者と雑談をしていた小橋川信子さん（左）

ロサンゼルスには「会ったことがない人でもウチナンチュ同士だと気軽に話すことができる。たくさん思い出をつくりたい」とほほ笑んだ。

紅型の衣装にハワイ風のスカートとレイを重ねた那覇市商工会議所女性部会の名譽理事副会長は「ハワイのウチナンチュに負けないように会議やレセプションを盛り上げたい」と話した。三千、三十一の両日に

は、第二十一回沖繩フェスティバルが開かれる。国際パレードやカチャーシーコンテスト、盆踊り大会などに加え、エイサーや太鼓、舞踊など沖縄の伝統芸能が披露される。